

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第五十七弾

## 神社本庁再生への道―その二十

### 神社本庁の歴史を踏みにじり続けた田中・打田体制― 新執行部は神社本庁憲章の精神で自浄の道を突き進め

ついに特捜部が動き始めた  
東京オリピック

## 藤原登 (フリーライター)

本連載でも何度か取り上げてきた東京オリピックを巡る数々の疑惑に關連し、スポンサー契約を巡る受託取崩の疑惑で、東京地検特捜部は大会組織委員会の理事であった元電通幹部の高橋浩之氏を八月十七日に逮捕した。ついに特捜部が動き始めたということだ。

高橋氏と神社本庁との関係は不明だが、組織委員会の評議員であったレスリング協会前会長福田富昭氏など、オリピック関係者の中には神社本庁との深い繋がりがある人物が多数見受けられる。中でも、組織委員会会長を女性蔑視発言で退任した森元首相の存在は別格だ。首相時代の平成十二年に起きた神道政治連盟国会議員懇談会の会

神社本庁が不正の  
隠蔽を続ける理由

奥いものには蓋を被せて張本人は逃げ回る手口の大胆さでは組織委員会のお手本とも言えるのが、本連載の主役である神社本庁だ。その期待に違ふことなく、神社本庁は不正の隠蔽と責任逃れをやり続けた。反対を押し切り上告した職員の仕事保全裁判では最高裁で全面敗訴が確定し、その後開催された評議員会では、痛烈な執行部批判を受けても、法人代表を自認する田中氏は答弁を事務局に任せて聞き流し、今も現体制を維持している。前号に記した通り、五月二十八日の臨時役員会で鷹司統

をあげている姿が思い浮かぶ。しかし、何のために田中一派は徒党を組み、鷹司統理の意思に敵対し続けているのか。田中氏が神社本庁総長の地位にないければ何かと都合の悪い御仁が大勢いるということは間違いないが、そこに、神社本庁の全面敗訴で幕を閉じた職員による地位保全裁判の切っ掛けとなつた、百合丘職舎の不正売却問題をも超える疑惑の本質が隠されているのではない。それが明らかにされることを彼らは何よりも恐れているのだ。

### 統理の地位と神社本庁憲章

鷹司尚武氏は九代目の神社本庁統理である。歴代統理は初代より就任順に、長谷外余男氏、鷹司信輔氏、佐佐木忠行氏、徳川宗敬氏、細川護貞氏、東園基文氏、久邇邦昭氏、北白川道久氏、そして現在の鷹司尚武氏である。

熱田神宮の宮司であり、神社本庁の草創期に大半を統理代務者として職務にあたった初代の長谷氏を除き、何れも旧皇族や公家、華族の出身であり、統理

に選任される前から、伊勢神宮の大宮司や皇室所縁の神社の宮司などとして、何らかの立場で神社信仰に關わっておられた方々だ。二代目統理の鷹司信輔氏は、現統理の祖父にあたり、就任当時は明治神宮の宮司をさ

もに選ばれた名実ともに権威あるお立場であり、故に、宗教法人法上の代表役員である総長を、十七名の理事の中から指名する権限を有しているのだ。田中一派の行為は、統理の権威の源泉である全神社界の意思をも顧みない行為である。

八月十五日付の神社新報に、「神社本庁憲章・敬神生活の綱領の精神で統理を推戴して祭祀の伝統を護らう」と題する、半面を使った堂々たる神奈川県神社庁の意見広告が掲載された。〔記事の下を参照〕「統理様の御意向を無視するがごとき行動が神社本庁役員の中に見られることは言語道断の所業」とし

て、「本来の神社界のあるべき姿」「国民にも信頼される神社本庁」のために奮励努力することを決議したものだ。自浄への力強い宣言である。他の神社庁場一致により推戴されてきた。つまり統理は、神社界の総意の次

### 藤原 登 (ふじわら のぼる)

昭和二十八年、東京に生まれる。昭和五二年、専門学校卒業後、広告代理店勤務の傍ら、独学で歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。